

「坊っちゃん」と日露戦争

—— 武士道、俠客、仇討ち

藤尾健剛

Botchan and the War between Japan & Russia

Kengo Fujio

「坊っちゃん」(明39・4)から私たち読者が受けとることができるメッセージには、二つの種類がある。

一つは、坊っちゃんの語る物語それ自体から読みとりうるメッセージである。当時の社会背景や文化的環境について特別の知識をもたない現代の読者が、作品から引き出すことのできる情報がこれに相当する。

もう一つは、作品だけから読みとるのは困難もしくは不可能だが、社会的・文化的な状況に関する知識や、世上に流通していた言説を参照するとき、そこに立ち現れるメッセージである。作者は、社会的出来事や新聞・雑誌に発表された論説などについて同時代の読者が一定の知識をもっていることを前提にして創作しているはずで、その前提が今日の読者に共有されていない場合、作者が発信したメッセージを捉え損なうことになる。そのような場合、読者が文献を繙き、その時代の事件や世論に関する知識を補うことで、メッセージを正しく受信できる。

たとえば、「坊っちゃん」が「ホトトギス」に発表される半月ほど前に、電車賃値上げ反対の市民大会がもたれ、坊っちゃんの再就職先の街鉄(東京市街鉄道会社)が襲撃されるという事件(三月十五日)があった。平岡敏夫は、これを踏まえて、「こうした騒然たる街鉄になぜ坊っちゃんを置いたかは明らかではないが、ここで注意しておきたいのは、こういう街鉄だからこそ、そこで無事平穩に暮らしているらしい坊っちゃんという存在は、ますます死んでいるといえる」と述べている。街鉄は市民の攻撃の標的になるような問題含みの会社であり、正義感に燃える坊っちゃんが健在なら、当然一騒動持ち上がって然るべきだが、一向にその気配は見えない。とすれば、正義の士としての坊っちゃんはずでに死んでいるというのである。平岡の解釈は、社会背景に関する知識を前提にはじめて読みとることのできたメッセージであり、第二の種類に属する。

仮に作品そのものだけから読みとることのできる情報を一次的メッセージとし、時代状況や当時の言説との関連で読みとりうる情報を二次的メッセージと呼ぶことにしよう。この区別はもちろん相対的なものである。一つひとつの言葉の意味をとつても、当時と現在では微妙な相違があるはずで、厳密を期そうとすれば、一次的メッセージと見えるものの多くが、その時代の言葉の意味に関する知識を必要とする二次的メッセージと考へなければならぬかもしれない。仮設的な区別と承知されたい。

本稿が主に考察の対象にするのは、「坊っちゃん」の二次的メッセージである。当時の雑誌に現れた論説を前提にして「坊っちゃん」を読み返せば、作者が社会の一部の動向に対して意想外に鋭い批判の目を向けていることが判明する。批判の内容が権力者の忌諱に触れる種類のものであったために、一次的メッセージの形で直接表明するのを避け、他の言説との対話的關係のなかではじめて浮かび上がる二次的メッセージとして埋設したのだと考えられる。そのため、今日の読者がこのメッセージを聞き取ることは極めて困難になっている。

「坊っちゃん」の一次的メッセージについては、多くの優れた業績があり、本稿が付け加えうるものはあまりない。しかし、二次的メッセージについて論ずる便宜のために、簡単に私見を述べておきたい。二次的メッセージは一次的メッセージを前提にしているために、私なりの観点から一次的メッセージを整理しておく必要があるからである。

以下、最初の節では、一次的メッセージについて考察を加え、二節以降、二次的メッセージを論じる。

一

石原千秋は、この作品の〈枠〉について、「〈始め〉と〈終わり〉」の対応關係に注目するなら、『坊っちゃん』は清に始まって、清に終わつていると言える。『坊っちゃん』の〈枠〉は清の物語なのである^②と述べている。物語の實質的な中身は、四国の中学校を舞台とする坊っちゃんの大立ち回りと言つていいが、確かに「〈始め〉と〈終わり〉」には清が点出されている。

清は、坊っちゃんが「将来立身出世して立派なものになると思ひ込んで居た」(一)。坊っちゃんとの關係を、「封建時代の主従の様に考へて居た」(同)彼女は、出世した暁に麴町か麻布あたりに構えるはずの「立派な玄關のある家」(同)に住んで、坊っちゃんに仕え続けることを夢見ていた。物語は、この清の夢想が破れ、坊っちゃんが四国に赴任するところから始動する。

四国に赴いた坊っちゃんは、清の要請に応じて、「玄關のある家」をもつことを断念したわけではなかったようだ。「立派な玄關を構へ」(八)た赤シャツの家を見て、「田舎へ来て九円五拾銭払へばこんな家へ這入れるなら、おれも一つ奮発して、東京から清を呼び寄せて喜ばしてやらう」(同)と考へている。小谷野純一は、『無鉄砲』に彼の基根を求めるとすれば、『清』の介入は矛盾といわなければならないのである。肉親、家

から解放されることが『坊っちゃん』の正規の道でありながら、『清』の設定は、主人公に眞の解放をもたらしてはいない」と述べている。清に關するこのような設定を否定的に評価すべきかはともかく、清の存在が、「無鉄砲」な坊っちゃんが氣性の命ずるままに、無軌道な方向に逸脱するのを妨げる錘りの役割をはたしていることは、小谷野の指摘するとおりである。不承不承であつても、坊っちゃんに近代社会に適合して、そこで安定した地位を得ようとする意向の萌す瞬間があつたとすれば、それは清の夢をかなえなければという氣持ちが働いたためであろう。

しかし、結局、坊っちゃんは近代社会におけるキャリアを葬る方向を選択した。任地を引き揚げ、家賃六円の家で清と住むことになった。「清は玄關付きの家でなくつても至極満足の様子であつた」(十二)という。

以上のように、「坊っちゃん」は、清の期待にそむいて、「玄關のある家」を持ってなかつた男の物語、——「玄關のある家」は言うまでもなく立身出世の成就を意味するから、立身出世のできなかつた男の物語である。

山田晃は、「清が坊っちゃんを偏愛したのは、すでに坊っちゃんのような人間が稀少になつていたからであつた、というのが最大の理由である。同時にこれは、清の如き人間の種が尽きかけていたということでもある。つまり、清が坊っちゃんを選んだのは、彼女の奉ずる理想が、世に一般のものでなくなつていくという事態への無意識の直覺によるものであり、その直覺が意識化される時、彼女は大きな不幸を背負い込むことになる」と述べている。坊っちゃんが清の期待どおりに立身出世を遂げることは、古い「理想」がなお健在であることを証してみせることを意味した。清は、坊っちゃんが物理学校を卒業して訪ねてきたとき、開口一番に、「坊っちゃん何時家を御持ちなさいませ」(一)と尋ねている。「当分うちは持たない。田舎へ行くんだ」と告げると、「非常に失望した容子で、胡麻塩の鬢の乱れを頻りに撫で」(同)ていた。このとき清は、「北向の三疊に風邪を引いて寐て居た」というが、平岡敏夫の指摘するように、このあたりから清の身に死の影が濃く漂い始める。清にとつて坊っちゃん、旧時代の「理想」の最後の砦だつたから、予期に反した都落ちの報告は、旧時代が音を立てて崩れるのに等しい思いで受けとめられたに違いない。物語の最後で、田舎の地位さえ失つて坊っちゃんが舞い戻つてきたとき、その帰還は古き良き時代がすでに過去のものになつていくことを確信させたはずである。

「坊っちゃん」の物語は、坊っちゃんに託した清の「理想」の頓挫に始まり、その完全な崩壊を確認して終わる。「坊っちゃん」が「清に始まつて、清に終わる」ところの「清の物語」であるというのは、旧時代の崩壊を確認する物語の謂いである。とすれば、「始め」と「終わり」に挟まれた中間が何を提示しているかも、おのずと明らかである。作品の大半を占める坊っちゃんの四国での体験についての物語は、清の夢を崩壊に導いたものの正体、〈近代〉がどんな時代かを語つた部分と理解すべきである。

坊っちゃんは、江戸っ子らしい偏見から、彼が「不浄の地」(十二)と呼ぶ任地の氣風をその土地特有のものと考えているが、それまでは学窓に

あつたために、世間の実情に接する機会に乏しかったことに由来する誤解であろう。平岡敏夫の見解を引きながら冒頭でも述べたように、街鉄に就職した坊っちゃんですでに坊っちゃんでなくなっているのも、任地への反発から反動的に理想化していた東京の実情が、四国と何ら変わりのないことを思い知らねばならなかったことに起因していると考えるべきである。

では、四国体験を通してその実質に触れる（近代）とは、いかなる時代なのであろう。

坊っちゃんが四国で遭遇する出来事は、赤シャツがうらなり君と遠山令嬢の縁談を破談に追い込み、令嬢をわがものにする顛末と、学校を牛耳る上で邪魔になる山嵐を排斥するに至る経緯との二つに還元できる。萩野の老婆によれば、赤シャツと堀田の関係がこじれるようになったのは、マドンナの問題で、山嵐が赤シャツに意見して以来のこと（七）であるから、後者の発端は前者にあり、前者こそ四国体験の実質を構成すると見なすことができるだろう。

土地の素封家だった古賀と、町で「一番の別嬪さん」（七）とうたわれた遠山令嬢のあいだに縁組の約束がととのつていた。ところが、うらなり君が「あまり御人が好過ぎる」（同）ために、詐欺の被害にあつて、古賀家の経済が傾き始めた。そんなことから興入れが延び延びになるところに、赤シャツが割り込んできて、マドンナを手なずけてしまった。赤シャツは、息子の昇給を求める古賀の母の依頼を巧みに利用して、密かに古賀の転任の手続きをとり、うむを言わず延岡に追いやった。――

この顛末から読みとれるのは、生存競争に勝利する者の遣り口のあざとさである。坊っちゃんは、古賀を「君子」と評した（六）が、近代の競争社会にあつては、「君子」であることは何の役にも立たないどころか、かえつて敗北を引き寄せてしまうようだ。赤シャツの口口に見てとれるように、法にさえ触れなければ、どんな陋劣な手段をも辞さないのが生存競争の実態であつて、「君子」であることは、競争者の乗じるところとなり、相手の意のままに操られて敗北を喫する条件になりかねない。

第二に、古賀・遠山両家の縁談が破綻し、赤シャツがマドンナを手に入れる経緯のなかに、弱肉強食の近代の論理が、古い地縁的な信頼関係を突き崩す過程が見てとれる。共同体を支配してきた相互関係や情誼の絆は、黄金の光に魅せられた人々の心をつなぎとめる力を失いつつあつた。マドンナは、個人と個人がそれを求めて争う欲望の対象、たとえば、富や地位、快樂といったものを象徴する存在と考へてよいだろう。斉藤英雄は、「清にも聖母マリア、つまり、『マドンナ』のような面がある」と指摘して、遠山令嬢と清の対応関係に注意を促した。遠山令嬢は、近代において解放された欲望が憧憬を寄せるマドンナ、一方清は、ゲマインシャフト的な社会における全一的な信頼関係を理想化する精神が夢見るマドンナである。清が老婆であり、坊っちゃんとのつかの間の幸福を生きて死を迎えるのは、欲望充足を目的として関係をとり結ぶゲゼルシャフトの原理に押されて、坊っちゃん・清に代表される関係が衰滅しつつあることを物語っているだろう。

坊っちゃんの体験する〈近代〉の実質を要約するなら、欲望充足を求めて、あらゆる陰謀・策略・奇計が行われる熾烈な生存競争がその最大の特徴である。競争の苛烈さのために、他人に対する信頼心や謙讓の美德といった古い徳目は無用の長物と化し、地縁・血縁その他のゲマインシャフト的關係に見られた全一的な共同性も解体しつつある、とまとめることができるだろう。これは、同時に、「坊っちゃん」の一次的メッセージの中核でもある。

最後に、「親讓りの無鉄砲」について私見を述べておきたい。父親の人物像が具体的に描かれていないために、「親讓り」の語が内実空虚な記号となり、さまざまな解釈がなされてきた。私は、この言葉はやはり文字通りの意味で受けとられるべきものと考ええる。

坊っちゃんは、父親の死に際して、「一週間許り徹夜して看病した」(十)という。なまなかの愛情ではできないことだろう。「おやぢは些ともおれを可愛がつて呉れなかつた」(二)と言うが、「おやぢ」について語る坊っちゃんの口吻には、どこかしら誇らしさや信頼らしきものが感じられる。みずからの「無鉄砲」を「親讓り」と呼ぶ坊っちゃんは、父親の気質のなかに自分と同質のものを感じとっていたのだろう。

その父親は、「何もせぬ男」(同)であった。おそらく〈近代〉の到来とともに、江戸っ子ふうの気質に従って生きることが敗亡を招くものでしかないと痛感する機会があつたのであろう。つまり、坊っちゃんの四国での体験をいち早く経験していたわけである。坊っちゃんの顔さえ見れば、「貴様は駄目だ」と口癖の様に云つて居た」(同)のは、同じ気質を受け継いだ息子が自分の二の舞を演じるだろうと危惧していたからに違いない。

父親には恒産があつたから、近代社会に見切りをつけて、無為徒食の傍觀的な生き方を選ぶことができた。一方、その息子にはすでに財産は残されていない。父親と同じ軌道をたどりながら、坊っちゃんは糊口の道を求めざるをえなかつた。こうして街鉄に再就職するわけだが、そのときの坊っちゃんは、「何もせぬ男」であつた父親と同じ気持ちで生きていたはずである。坊っちゃんはまさしく「死んでいる」(平岡)のである。「親讓りの無鉄砲」の一句は〈空所〉の仕組まれた言葉であつて、坊っちゃん父子の運命を重ね合わせることで充填される仕掛けであつた。

二

最近、坊っちゃんの人物像の武士的性格が注目されている。小谷野敦は、多田満仲以来の清和源氏の血統に連なる点、性に対して潔癖な「野暮な正義漢」である点、「山姥」の系譜に属する女性たちの庇護を受けている点などを重視し、坊っちゃんの人物像の原型を、戦国武士の理想が託された坂田公平にみる見解を示した。佐伯順子は、『葉隠』を引き、「流血と闘争」を美化している点、「男どししの紐帯」を尊重している点、「損得勘定」を顧慮せず「直情的な行為」にはしろうとする点、「知恵分別」を蔑視し「学問」を軽視している点、そして、それらすべてを包括する

意味をもつところの、「男らしさ」の規範に従おうとしている点などにおいて、『葉隠』の武士道に通じる性格が坊っちゃんに見てとれるという。私も、坊っちゃんが武士のエートスを体現するラスト・サムライであり、武士のアレゴリーとして造形された人物と考えるが、そもそも武士とはどういう存在であろうか。

多くの武士論・武士道論が言及するのが、「義理」の観念である。井澤蟠龍（一六六八—一七三〇）は、『武士訓』で、「四民の中にて。士を三民の上に置いて三民にうやまはしむるものは。他なし。義理をよくさとして。子としては孝をつくし。臣としては忠をつくし。おのれをおさめ。人をおしゆる職なればなり。しかるを職とする所の義理をとりうしなひ。廉耻のこゝろなく。利欲におぼるゝときは。身をほろぼし。家を絶すにいたれり」と述べている。武士の職責は、「義理」を遵守して、農・工・商三民の儀表となり、そのことを通して社会秩序の安定に寄与する点にあると考えられている。「義理」の内容としては、親に「孝」を、主君に「忠」を尽くして「おのれをおさめ」ることが挙げられているが、父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信の、いわゆる五倫の道をはじめ、人間として踏み行うべき道義的な正しさの謂いであろう。続いて、「義理にさときものは利慾にうとく。利欲にさときものは義理にうとし」とあり、「義理」と「利欲」が対立的なものとして位置づけられている。中江藤樹（一六〇五—一四八）の『文武問答』には、「君子は義理を守り道を行ふ外には毛頭ねがふ事なく、欲心のまよひ少しもなきゆゑに、義理をたて、道を行ひ、主親のために命を惜まざる事やぶれたる屍をすつるが如く」云々と記されている。「義理」の前には欲心ばかりでなく、生命までも擲すべきものと考えられている。

坊っちゃんは、日露戦争の祝勝会の日、山嵐とともに、喧嘩騒動に巻き込まれたが、山嵐だけがその責任を問われて辞職を勧告された。坊っちゃんはこの処分を理不尽なものとして、校長のもとに談判に赴き、「私も辞表を出しませう」（十二）と申し出る。「来てから一月立つか立たないのに辞職したと云ふと、君の将来の履歴に關係するから」と慰留する狸の言葉に、「履歴なんか構ふもんですか、履歴よりも義理が大切です」と言い放っている。友に対する信義を守るために、キャリアに傷が付くことも厭わない点、「義理」を利害や生命の上に置く武士の面目を認めることができるだろう。赤シャツからの増俸の申し出をいったん承知しておきながら、うらなり君が無理やりに転任させられることで生じる余剰分と判明するや、すぐさま引き返して、前言を翻す点にも、同じ武士的エートスが確認できる。

「義理」を尊重する武士気質は、山嵐にも認められる。萩野の老婆によれば、マドンナの一件で、「古賀さんに御気の毒ぢやて、御友達の堀田さんが教頭の所へ意見しに」（七）行ったという。赤シャツが学校内で人事を左右する権限をもつことを考えれば、友人のためにはかる山嵐の行為は、身に降りかかる危険をも顧みずに「義理」を踏み行つたものと評価できる。その他にも、寄宿舎での騒動の処分を決める職員会議で、ただ一人立ち上がって、校長・教頭の穩便説を反駁する雄弁を揮つた点（六）、うらなり君の転任を阻止しようとして、「校長に二度、赤シャツへ一

度」(九)、「談判」に赴いている点などにも、「義理」を重んじるひとなりが窺える。「高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹する」(一〇)のが教育の目的の一つとする発言もある。「会津つぼ」(九)というだけで出自は語られていないが、山嵐も武士的エートスを濃く体現する人物である。

稲垣達郎は、「正直」が坊っちゃん「内外を照らす鏡」であり、「かれの思考と行動とのすべての論理を導き出」していると指摘している。「世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか」(四)と語っているように、「正直」は、坊っちゃんの倫理観の根幹をなすものである。先の山嵐の発言に、「高尚な、正直な、武士的な元気」とあり、武士気質と「正直」が密接に関わるものと捉えられている。

武士論のなかで「正直」に触れているものに、貝原益軒(一六三〇—一七二四)の『武訓』の次の一節がある。

夫、仁義の道、正直にしていつはりなき、是信なり。信なければ、からもやまとも、古も今も、人道たゞざれば、武道も行はれず。(中略)もし、表裏多くして、人を欺き、いつはりを行ひて、士卒そむきうらみば、百万の兵ありとも、戦ひかつことかたかるべし。

井澤蟠龍の『明君家訓』も、武士たる者は「節義の嗜」がなければならぬとして、「節義の嗜と申は、口に偽をいはず、身に私をかまへず、心すなをにして外にかざりなく、作法不乱、礼義正しく、上に不諂、下を不慢、をのが約諾をたがへず、人の患難を見捨ず」云々と説明している。「正直」に相当する徳目が、「節義の嗜」のうちの上位に位置づけられている。「裏表のある奴」(一〇)を嫌悪し、「正直」を守り本尊とする坊っちゃんは、「節義の嗜」を心得た人物と評価できる。

坊っちゃんの人物像に武士らしくない点も少なくない。たとえば、「節義の嗜」として列挙されていた徳目のうち、「作法不乱、礼義正しく」などは当てはまると思えない。しかし、坊っちゃんを特徴づけるもつとも中心的な特性の二つが、ふたつながら武士気質に合致している点は重視されるべきである。多田満仲以来の家柄を誇る旗本の出自をアイデンティティの核に据えていることも考え合わせれば、坊っちゃんを武士的な人物と見ることが許されるだろう。

坊っちゃんの人物像に関して、もう一つ留意しなければならないのは、彼の非力さである。前の節で述べたように、「坊っちゃん」の一次的メッセージの中核は、奇計や陰謀の跋扈する生存競争が近代社会を特徴づけており、ここでは古い徳目が役立たないばかりでなく、かえって身を破滅に導く誘因になりかねないということであった。うらなり君と同様、「義理」や「正直」にこだわる坊っちゃんは、生存競争の劣敗者の運命を免れないだろう。現に、寄宿舎の騒動では、中学生を相手にしてさえ戦いを有利に進めることができていない。この騒動は生存競争とはいえないが、敵側の中学生が陰険この上ない奇計・策略を逞しくしている点で、生存競争の特徴が凝縮されている観があり、そのアレゴリーと考えてよいだろう。「正直だから、どうしていゝか分からないんだ」(四)と坊っちゃん言うが、武士時代に要求された「正直」はあり余るほどあっても、近代の生存競争を勝ち抜くのに必要な「知恵が足りない」(同)ために、「土百姓」(同)と軽蔑する敵にさえ苦戦を強いられている。まして複雑極まり

のない権謀術数の使い手である赤シャツを向こうに回した戦いで、勝利をかち取ることなど到底望めない。末段で、山嵐とともに、腕力で赤シャツたちに制裁を加えることには成功しているが、「坊っちゃんたちの最後の奮戦が、ほとんど何らの実効も生まないで、その田舎中学校の周囲に立ちこめている悪気流は、依然、微動だにしないはずであった」と竹盛天雄が言うように、学校を舞台にした生存競争において勝利を博したのが、敵側の追放に成功した赤シャツたちだったのは明らかである。

坊っちゃんは単に侍であるだけでなく、無力な侍として形象化されているのである。そういえば、坊っちゃんだけでなく、この作品で善玉に位置づけられている山嵐やうらなり君は、いずれも士族ないし武士気質を濃厚に体现する人物として造形されている。しかも、赤シャツ一党の奸策にあつて生存競争に敗北する運命を与えられている。これは偶然とは思えないが、なぜこのような設定が行われているのだろうか。

解答はおそらく作品だけを考察しても得られないだろう。作者が「坊っちゃん」に仕組んだ二次的メッセージを考慮して、同時代の言説に目を向ける必要がある。

日露戦争下のジャーナリズムに見られる顕著な現象の一つに、武士道に関する議論がさかんに誌上に現れたことが挙げられる。日露戦争で日本軍が連戦連勝の勝利をおさめたのは、もっぱら日本国民の血脈中に受け継がれた武士道精神のたまものであつて、これを国民道徳の中核に据えるべきだという主張が行われた。

たとえば、井上哲次郎は、「時局より見たる武士道」(中央公論 明37・7)で、「戦争をするには軍艦、大砲を初めとし、精巧なる機械がなくては戦勝の目的の達せらるゝ筈はありません。併しながら、此処に吾々の見る所では、欧米諸国の人の一寸注意しない一の大なる原因があるではあるまいかと思ふ、即ちそれは他ではありません。武士道であります」と述べている。戸水寛人も、「武士道と今後の教育」(同、明37・9)で、「若し武士道が減じたならば日本は外国と戦ふても今日の如く強く、今日の如く大なる成功をあらはすことは出来ないと思ふ。であるから若し日本を強くせんと思はゞ是非共武士道の養成に注目しなければならぬ」と語っている。「中央公論」では、戸水の論の後、三十七年九月から翌年八月まで、武士道に関わりのある論説を連載している。¹⁰⁾

「太陽」誌上にも、有馬祐政の「武士道に就きて」(明37・10)が掲出されたが、そこで有馬は、井上、戸水と同趣旨のことを述べた上で、「明治十五年一月四日の勅諭は、忠節を尽すを本分して、礼義を正し、武勇を尚び、信義を重んじ、質素を旨とせよとのたまひ、而して是れ天地の公道、人倫の常経なりと断じたまひ、以て一般国民の準守すべき、古来伝存の武士的思想、即ち狭義なる武士道の要領を提示したまひたるに外ならず」と指摘している。「軍人勅諭」に武士道の思想が盛り込まれているというのである。「軍人勅諭」に先だつて頒布された山県有朋の「軍人訓誡」

(明11・8)には、「今ノ軍人タル者ハ縦ヒ世襲ナラズトモ武士タルニ相違ナシ。(中略) 忠勇ハ我々ノ祖先ヨリ受け伝へ我々ノ血脈中ニ固有スル遺物

ナレバ、永世之ヲ保存シテ子々孫々ニ至ルモ、不忠ト卑怯トノ汚名ヲ以テ祖先ノ遺物ニ傷クルコトナカランヲ願フハ我々ノ衷情ナラズヤ」とあつた。西南戦争での経験などから、徴兵令によつて召集された庶民兵士が武士に比して「忠勇」の点で欠けるところのあるのを危惧して、彼らを「武士」とおだてあげ、武士道を血肉化させようと企図したのだと思われる。「軍人勅諭」も、この山県の路線を継承するものである。

日露戦争に軍人として参戦した桜井忠温の『肉弾』（明39・4）を繙くと、山県のプランが予期以上の成功をおさめていることが確認できる。「祖宗以来、神洲に磅礴たる大和魂の凝りて成したる我軍隊の忠魂義胆」（第二、「発しては万朶の桜となり、凝つては百鍊の鉄となる大和魂」（第六、「汝等が日頃練り鍛ひたる武士道の精神を發揮するは真に此時である」（第十七、「環睹の列国をして、大和魂の発射せる肉弾の効力を驚愕せしむるに至つた」（第二十五）などの文字を至るところに見いだすことができる。とりわけ注目し値するのが、第二十四に引用された一兵士の書簡である。ある上等兵が家族に宛てた遺書だが、その末尾に次のように記されている。

思へば果敢なき身の素姓、土百性ヌマの我々が、茅屋筵座の上に於て空しく屍を埋没せんよりは、花々しくも今茲に名誉の戦死を遂たなら、花は桜と謡はれん……

大元帥陛下万歳くく

本文末尾の「花は桜」云々は、いうまでもなく、「花は桜木、人は武士」の成句を踏まえたもので、死を恐れずに奮戦して、潔く死ぬことが、庶民の出でありながら、武士の名誉を手につくことと受けとめられている。『肉弾』の第六からの引用でも、桜が「大和魂」のメタファーとして表現されており、「大和魂」＝武士道の観念の中核に置かれているのが、潔く散ること＝死ぬことであると分かる。井上哲次郎は、先の文章で、「今日の軍隊が天皇に対して忠節を尽すのは、矢張り封建制度の時代に、特殊の藩士が君主に対して忠節を尽したのと同じ精神であります。（中略）武士道は自我より一層尊きものを発見して、之れが為に身命を擲つことであります。古来の語を借りていへば、即ち忠節を尽すので、之れが為に身命を鴻毛よりも軽しとするのであります」と述べており、命に執着しないことが、そのまま忠節を証することとなるかのような論理を展開している。戸水寛人は、「封建が仆れて平民にも武士道の普及した暁からは其平民は元の士族と同じ地位に進んだ」と、大いに「平民」を持ち上げているが、「軍人訓誡」の山県有朋と同じ底意が感じられる。士族に対する平民の劣等意識を利用し、「士族」の名誉を好餌として庶民兵士をして喜んで死地に赴かせようとする企みではないか。端的にいえば、武士道の復活・維持を唱える言説は、日本を軍事的強国とするために、死を恐れぬ殺人機械を量産しようと企図するものである。

日露戦争に関する言説のもう一つの特徴として、特に開戦前や初期段階で、これを正義の戦いと位置づける主張が行われたことが挙げられる。井上哲次郎は、「日本現今の地位と境遇」（『太陽』明37・1）で、北清事変後も、軍隊を駐留させ、満州・朝鮮地方に対する帝国主義的野心を隠そう

としないロシアの動向を、「不正不義を働いて我慾をみたす」ものとし、ロシアを討伐するための戦争を、「不正不義を撲滅して平和を恢復」し、「正義人道の発展を助くる」行動と位置づけた。大町桂月も、「日露戦争の意義」(文芸倶楽部 明37・3)で、「露は、東洋の平和を破壊し、例の侵略主義を逞しうせずんば止まざらむとし、日本は例の正義に杖りて、飽くまでも東洋の平和を維持せむとす」と述べている。「日本は夙に義侠心を起して、韓国を援助せり」、「日本は義侠なり」などの文字も見える。

さて、「坊っちゃん」の一次的メッセージは、「卑劣な陰謀をもつて臨まなければ、生存競争に勝利することは不可能である」であった。この節で考察した、「武士は必ず敗れる」も、一次的メッセージに付け加えることができるだろう。これを日露戦争に関する言説に突き合わせることで、二次的メッセージが得られる。戦争も国家と国家とのあいだで戦われる生存競争に他ならないが、これに打ち勝った日本は、赤シャツが繰り出したのと同じ陰謀・策略の類を用いたことになり、「正義」とか「義侠」とかと呼ぶにふさわしくない手段が弄されたことになる。日本の兵士は武士道に則つて戦つたというが、「坊っちゃん」の一次的メッセージが明らかにしたように、倫理的な潔癖さに執着する武士は、近代の生存競争では敗北を運命づけられている。最新鋭の兵器と深謀遠慮の知略を必要とする近代戦に、武士道に活躍の余地が残されているはずがない。日露戦争の勝利を武士道に帰そうとする言説は、笑うべき時代錯誤であり、合理主義を基調とする近代化に逆行する反動思想と評さざるをえない。武士道の高唱は、科学的・技術的な卓越性と戦争の持続を支える経済力が勝敗を決する近代戦の非情さを隠蔽し、敵を出し抜く血なまぐさい奇計や謀略が跋扈する戦場の陰惨さを糊塗するための欺瞞以外のものではない。もし武士道が発揮されたというのが本当なら、それは「正直」や「義理」を重んじた戦いがなされたということではなく、兵士が死を恐れずに勇敢に戦つたという意味に限定される。つまり、武士道は、生命に対する兵士の執着を断ちきるためにだけ利用されたにすぎない。「坊っちゃん」は、生存競争に敗れる武士の運命を描くことを通して、日露戦争の勝利を武士道に結びつける言説の虚構性と反動性を暴いているのだが、その種の言説が国民を欺罔して、進んで死地に赴かせようと企図している点にも、漱石の批判は及んでいたかもしれない。

桜井忠温は、『肉弾』のなかで、「敵は男らしくも無い小策を弄し、奸智を廻らす事^な多次^くなり」(第十六)などと、しきりにロシア軍の「陋劣」(同)さを強調し、一方日本軍は、武士道に恥じない正々堂々とした戦いに終始したかのように語っている。ロシア軍が当時国際的に禁じられていたダムダム弾を使用したとする記事が新聞に出ているから、ロシア軍の戦法に卑劣・奸悪な点があつたというのは事実だつたかもしれない。しかし、兵士個々人の生命と祖国の前途が賭けられた戦争であつてみれば、日本軍とて、きれいなことで終始するわけにもいかなかつただろう。福沢諭吉は、日清戦争について、「支那の先哲は春秋に義戦なしとて嘆息したれども、義戦なきは豈唯春秋の時代のみならんや。世界古今に通じてあらゆる戦争を計ふるも、一として義戦の名を下すものはある可らず。戦争は唯是れ人間が自利の爲めに運動したるものと知る可きなり」と述べているが、

日露戦争にももちろん同じことが言える。

徳富蘇峰は、日清戦争中に書かれた『大日本膨脹論』（明27・12）で、「今後六十年に於ては、日本国の面積を二倍にするにあらざるよりは、今日に於ける人口と面積との比例を保つ能はざる也」と指摘し、「我国将来の歴史は、日本国民が世界の各所に新故郷を建設するの膨脹史に相違なかる可く」云々と述べている。日清戦争がすでに領土拡大の帝国主義の野心と結びつけて受けとめられていたことが分かる。実際、この戦争に勝利した日本は、清国から遼東半島の割譲を受けることに成功したが、三国干渉によって野望の頓挫を余儀なくされた。日露戦争が満州支配の政策を貪婪に推し進めるロシアの動向を黙視しえず、返還を強いられた満州の地を再びわが手にとり戻そうとする動機を潜めていたとしても不思議はない。戦争の終結を見ない段階から、添田壽一「満韓経営管見」（『太陽』明37・7）、神鞭知常「満韓に対する経営」（同、明37・12）、新渡戸稲造「日本帝国の膨脹」（同）などの論説が誌上を賑わしているのは、「正義人道の発展を助くる」という大義名分の陰に隠されていた真の動機を露呈しているだろう。日清戦争後に急速に発達した日本の資本主義は、満韓地方の市場に決定的に依存していたから、これを失うことは経済発展に致命的な打撃を与えることになりかねなかった。幸徳秋水は、戦争を誘発した経済事情を端的に指摘している。

露国が西シベリア及東清鐵道の為に既に十億万ルーブルの巨額を費せるは、何の為めぞや、唯だ自国の物品を満洲清国に売らんが為めのみ、而も日英米の商業的競争は彼の到底抗敵し得ざる所也、若し満洲鐵道の解放せんか、露国の商業は全く一掃し去られて、従来鐵道其他の経営は徒に他人の為に嫁衣を製するに止まらんのみ、是れ実に彼の堪ゆる能はざる所にして、彼が海關を扼して、他国の輸品を防遏し、此地の利益を独占せんとするは怪しむに足らず、而も我日本に至りては、既に満洲に於て二千万円の貿易を有す、経済的利害の関する所、之を露国の手中に委する能はずとする、亦元より其所、況んや国内資本家の新市場を求むるの聲は、益々高くして、之が為めには遂に干戈の惨を省みるに違あらざる者の如し、^⑧

日露戦争が海外の權益をめぐって戦われた帝国主義戦争であったとすれば、「正義人道」のための戦争という謳い文句は、国民を瞞着する虚構だったというべきである。と同時に、武士道精神に則って戦われたとする言説も、うさん臭いものにならざるをえない。井澤蟠龍の『武士訓』に、「義理にさときものは利慾にうつとく。利欲にさときものは義理にうつとし」とあったように、利害得失を顧慮せずに、ひたすら「義理」につかえるのが、武士の武士たるゆえんだったからである。漱石が日露戦争と武士道をつなげる言説を批判しようとしたのは、その反動性を黙視できなかったことに加えて、この点に関わっていたと思われる。もちろん、国内にいて戦場の実状をつぶさに知りうる立場にない漱石に、日本軍の戦いぶりが武士道になつたものかどうかを判断できるはずはなかった。しかし、後に述べるように、日露戦争の帝国主義的な性格を見通していたと推測される漱石には、この戦争を「武士道」に結びつけることがいかにもそぐわない、不合理なことと感ぜられたのであろう。

ところで、前節では、坊っちゃんを武士のアレゴリーと理解した上で、日露戦争をめぐる言説に対する批判を読みとつたが、坊っちゃんを純然たる武士と見るのは、何かしらそぐわないものが感じられないだろうか。

小田実は、「坊っちゃん」を「ケンカ小説」と見なし、坊っちゃんの関わる喧嘩が「売りのケンカであつて買ひのケンカではない」と指摘している。確かに、坊っちゃんは、事あるごとにケンカ腰になり、喧嘩あれかしと待ちかまえている観がある。最初に教壇に立つた日、二時間目の授業に赴く坊っちゃんは、「何だか敵地へ乗り込む様な気がした。(中略) 喧嘩なら相撲取とでもやつて見せるが、こんな大僧を四十人も前へ並べて、只一枚の舌をたゞいて恐縮させる手際は無い。然しこんな田舎者に弱身を見せると癖になると思つたから、成るべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやつた」(三)と、まるで生徒に喧嘩を吹っ掛けていくかのようである。赤シャツから山嵐に用心するように吹き込まれた後でも、先日奢られた氷水の代価を突き返した上で、「喧嘩をしてやらう」(六)と待ちかまえている。「人間は竹の様に真直でなくつちや頼母しくない。真直なものは喧嘩をしても心持がいゝ」(八)の一節もある。坊っちゃんの身上ともいえる「真直」な気性が、潔癖な生き方とか出処進退のいさぎよさとかいうものではなく、喧嘩の美学に結びつけて考えられているのは驚くほかないだろう。

大道寺友山(二六三九—一七三〇)は、『武道初心集』で、武士の喧嘩を「不忠不義」として否定している。おのが身命も自己のものではない。いつ何時主君の御用にお立て申し上げねばならないかはかりがたいのであるから、「大食大酒淫欲等の不養生」はつつしまなければならぬ。「ましてや喧嘩口論など仕出して友傍輩^{トモノカミ}を打果し。我が身命を失ふの類ひの不忠不義は、深く慎むべき事に候」と述べている。山鹿素行(一六三二—一六八五)も、『武教小学』で、「互いにゆずりあう礼をまもつて人のじゃまをしたり、乗っている馬が人に泥をはねたりした時には、すぐに自分のあやまちであつたとして、ことをひくくして礼儀正しく相手の人にあやまるならば、そこにどうしてあらそいなどが起こるであろうか」と述べている。同書は「江戸時代を通じて武士教育のための教科書として、単独でもっとも広く読まれたもので」¹⁶⁾ あつたから、江戸時代には喧嘩は武士にふさわしくないと受けとめられていたと考えてよいだろう。もつとも、例外もないではない。山本常朝(一六五九—一七二〇)の『葉隠』には、「喧嘩打返しをせぬ故恥になりたり。打返しの仕様は踏みかけて切り殺さるゝ迄なり」と、不穏な言葉が記されている。『葉隠』は、「中世武士の伝統を支持する立場から」(田原嗣郎)書かれたとのことであるから、同時代の武士の意識を反映するものではないだろう。その常朝ですら、「買ひのケンカ」の場合を説いているので、坊っちゃんのようにむやみに喧嘩を吹き掛けるのをよしとしているわけではない。

「坊っちゃん」の主人公の人物像に関して、これを俠客と結びつけて理解する見解が早くから行われている。長谷川天溪は、「反動の現象」

〔太陽〕明39・5)のなかで、「坊っちゃん」は純粹の江戸っ子なり。『竹を割つた様』の氣象とは簡にして其の性格の全部を説明したる譬喩なり。常識最も善く発達し、これに仁俠肌と妄我的獻身の性とを加へたるが此主人公なり」と述べている。「常識最も善く発達し」とは不可解な評だが、「仁俠肌」と捉えている点は注目される。和田利男は、「現代小説でこのくらい喧嘩の好きな主人公もちよつとあるまい。(中略)弱きを助けて強きを挫き、善に与して悪を伐つ仁俠の風は、これも江戸っ子の特徴であり、坊っちゃんの美質である」と述べている。他に、島田俊之、秋山公男なども、坊っちゃんの俠客ふうの性格に触れている。なるほど、君臣主従の關係に拘束され、支配者階級の一員にふさわしい身の処し方を求められる武士に喧嘩はふさわしくないが、法と秩序の外側に生きる俠客であれば、喧嘩好きであつても不自然ではない。

坊っちゃんが武士ではなく、俠客であるとすれば、彼の存在を武士のアレゴリーと見ることを前提にした前節の議論がその土台を失うことになりかねない。が、俠客を武士の亜種と見なすことができれば、仮説をいくぶんなりとも支えることができるだろう。実際、俠客と武士は、発生的にも、本質上も、深い類縁性で結ばれている。尾形鶴吉は、「俠客道なるものは、江戸時代に武士道が庶民の間に移り普及した所謂庶民化した武士道そのものであり、且つその結果であつた」と述べている。尾形は、俠客の発生を史的にたどっているが、初期の俠客は、浪人者や武家に奉公する中間者など、武士と関わりの深い人々や、旗本などの現役の武士によつて担われていた。この初期俠客の精神が火消し人足や博徒など、町人を主体とする後の俠客にも受け継がれている。尾形は、「義理と人情の前には、何物も恐れない所」に「俠客道」の本質があると言ひ、「眞の仁俠といふは、其氣象廉潔を宗として、朋友信あるの道を守り、仮にも言を食はず、約を違へず、交友と是非を同して患難に臨んで志を変せず、義を見て勇み、死を顧みず、弱きを扶けて強きを拉しき、無慾にして利に移らず、厚く施して薄く望み、人の命を救ひて功にはほこらず、専ら仁義の勇を勵んで公侯を挫き、義を泰山に較らば、命を鴻毛に比するを以て仁俠の立派とせり」との「赤本知恵鑑」の一節を理想の俠客を語つたものとして引用している。これは、「死を怖れざる勇猛心」と、「強者に屈せず弱者を侮らず、權勢と利益とに惑はされず、友を愛し人を慈み信義を守り礼節を重んずる氣風」を特徴とする武士道と怪庭のないものと評価できるだろう。

坊っちゃんの「仁俠」的性格について触れた先の文章のなかで、長谷川天溪と和田利男は、これを江戸っ子氣質の一環として説明していた。西山松之助は、「江戸っ子」の条件として、江戸生まれであること、金離れのよいことなどに、「いき」と「はり」を本領とする」ことを挙げ、後者の「はり」が「初期にかぶきものと呼ばれ、やがて男だてと呼ばれた遊俠の徒の心構えや行動様式に代表されるものであつた」と指摘している。「はり」とは、「張りあふこと」、「対抗し、競争し、競演し、せりあい、負けじ魂を突つ張つて一歩も引かず、というように、主体性を強調している状態である」(西山)。尾形も、江戸っ子氣質が、「関東江戸をして、無類の俠客發生地帯とした」と指摘している。江戸っ子氣質の一部が極端化されて、俠客として具体化されたと考えることもできるが、町奴や火消し人足などの俠客が、武士の狼藉などから町人を守る市民兵的役

割を果たしたところから、俠客を偶像化する傾向が生じ、江戸っ子みずから俠客ふうの「はり」を尊ぶことが行われたという側面もあっただろう。歌舞伎や講談などの江戸期のメディアがさかんに俠客をとり挙げたことも、俠客の偶像化に拍車をかけたようだ。尾形は、「俠客の氣風が、人心に感化を及ぼしたのは、彼等庶民が俠客に直接したのに依る事は勿論であるが、他の一面に於ては、演劇・講談等が、俠客を詩化し、美化して現前せしめ、民衆の本心に触れしめた事が、大いに与つて力あることを、見逃す事ができない」と述べている。坊っちゃんが武家の出でありながら、「江戸っ子」を自称し、俠客ふうの行動様式を身につけているのをいぶかしく思う向きもあるだろうが、メディアの影響力を軽視すべきではないだろう。芝居小屋や寄席にさまざまな階層が入り込んでいたとすれば、階層の別にかかわりなく、均一な価値観や趣味・嗜好・行動様式が人々の心に刷り込まれる結果になる。坊っちゃんの語り口に落語の反響が聞き取れることがよく指摘されるが、歌舞伎の影響らしきものも見て取れない。ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、モンガールの、岡っ引きの、わんく鳴けば犬も同然な奴（九云々の悪態は、「ここの溝板どぼやらうの、だれ味噌やらうの、出し殻やらうの、蕎麦かす野郎め」という助六の啖呵の二番煎じであろう。八に「河合又五郎」の名が引き合いに出されているが、これは三大仇討ちの一つとされる「伊賀越仇討」中の人物である。この物語は、歌舞伎や講談、浄瑠璃で頻繁にとりあげられたから、古典演芸のファンには馴染み深い名まえだっただろう。坊っちゃんが芝居や寄席の得意客であったことは確かであろうである。武士と俠客はもともと類縁性の深いものだった上に、歌舞伎や講談の感化が加わって、武家の出でありながら、坊っちゃんは、俠客ふうの価値観と行動様式を内面化するに至ったと考えられる。

しかし、俠客と武士が歴史上関わりが深く、概念上も共通する特性を含んでいても、存在としては別のカテゴリーに属するのであるから、俠客である坊っちゃんを武士のアレゴリーと見ることはできないという見方もあるだろう。これを反駁するには、俠客と武士の区別自体を無化する観点をさぐるしかない。そこで注目されるのが、『義経記』や幸若舞曲、謡曲などに造形された弁慶像に関する津田左右吉の見解である。津田は、弁慶の人物像に「二つの要素」があるという。義経の従者となつて後の弁慶は、「なみくならぬ武勇と機略とを具へ、而も主君のために渾身の情を捧げて粉骨壘身する、血も涙もある英雄」として描かれている。注目したいのは、義経と出会う以前の弁慶像である。「直情径行、怒れば鬼神も恐れ戦き、笑へば嬰兒も共に戯れるといふ、極めて無邪気な性質に、六尺ゆたかな大男と天の成せる絶倫の腕力武技とを配して、思ふまゝに暴れまはらせ、世間と世間の権力とを事もなげに蹂躪させてゐる」という。津田によれば、弁慶の二面性は、「当時に於いて尚ばれた武士氣質の二つの方向を、一人の弁慶に結びつけた」ことに由来するという。義経との邂逅以後の弁慶は、固定的な君臣関係における理想的な武士像であり、邂逅以前の弁慶は、戦乱の世を生き抜くに足る強靱な武力や腕力と、戦うことそれ自体を楽しんでいるかのような自然児的精神性をもった武人の理想像であろう。前者は仕える武士、後者は闘う武士として区別できる。「秩序の定まらぬ、強者の権利の行はれる世であるが、狭い君臣主

従の間にはなほ其の間の情誼が保たれてゐる」たこの時代にあつては、異質な二つの武士像がともに理想的なものとして思い描かれたのだと考えられる。

後者の闘う武士の理想像に関する津田の説明から、「坊っちゃん」の主人公や俠客のイメージがただちに連想されるだろう。私は、それに加えて、小谷野敦が坊っちゃん的人物像の原型として挙げた坂田公平を想起する。小谷野は公平のひととなりをもっているが、気が短くて粗暴、知力に乏しく、無邪気で粗忽」と説明している。簡略ながら、義経と出会う以前の弁慶像とぴたりと符合している。おそらく坊っちゃんの原型は、公平を経由して、弁慶にまで遡りうるだろう。

小谷野は、公平や坊っちゃんが乱世にこそふさわしい英雄像であると指摘して、次のように述べている。

公平にしてもそうだが、現世的な秩序に納まることができず、最終的にはそこからはみ出し、自然の懐へ帰っていくほかない坊っちゃん的人物は、畢竟、滑稽であると同時に、妻帯といったすぐれて日常的な世界とは無縁の、「闘争」という非日常的な時間のなかにのみ生きることが許され、日常と秩序が回復された暁には静かに退場するほかない悲哀をも運命づけられているのだ。

だが、「日常と秩序が回復された」後も、「静かに退場する」ことを肯んじなかつた人々もいた。俠客である。俠客史の初期に登場する旗本奴は、公平型の武士の系譜を引く存在と見ることができよう。

幕藩体制が確立するにつれて、旗本の一部に、幕政に対する不満を抱き、やり場のない鬱屈した気分をいだく人々が現れた。彼らは、譜代の家柄でありながら、知行に恵まれず、不如意な生活を強いられていた。加えて、泰平の世となつて、武力よりも学問、殊に儒学の素養が要求される文治主義が行われていたから、合戦盛んなりし頃の夢を忘れられぬ武士たちは、疎外感を深めざるをえなかつた。かくして彼らは、人目をひく異装を凝らし、無頼な行動に不平不満のはけ口を求めようになつた。それが旗本奴である。「彼等が表面業とする所は、博奕を打つ事、喧嘩する事、喧嘩口論の調停をする事、又は試し切、辻斬等の狼藉は勿論の事、常に結党・交遊・花街に遊ぶを事として居た」(尾形)。

旗本奴は、町奴以降の俠客に見られる、「強きを挫き、弱きを助ける」仁俠の気風に乏しく、武士の威を笠に着て、町人に対する落花狼藉を専らとしたにすぎない。しかし、幕府権力と衝突することも恐れず、武士本来の闘争心を解放できる自由な境涯を求めようとしたことは確かである。尾形は、「封建現実社会に対して不平と反抗、解放と自由の思想に燃えた彼等は、過去の思慕とこの疾患ある社会を是正せんとして、三河気質と偏俠無頼な行装で、のたうちまわる事となつた」と評している。権威に反逆し、法と秩序を蹂躪してまで「解放と自由」を求めようとする旗本奴の気概は、それ以降の俠客にも受け継がれたと考えられる。

俠客が弁慶以来の闘う武士の系譜を引く存在だとすれば、武士と俠客の区別は無化されるだろう。先に『武道初心集』や『武教小学』を引いて

示したように、江戸期の武士には喧嘩は御法度であった。江戸期の武士は安定した君臣関係のなかで生きる仕える武士であり、秩序内的な存在であったことを思えば、喧嘩が回避されたのは当然である。一方、権力や秩序の拘束を踏み破っても、もって生まれた腕力や胆力を存分に解放しようとする闘う武士のタイプにとつては、喧嘩は自己の力量を発揮する絶好の機会であつたはずである。

ところで、坊っちゃんが俠客型の武士だとすれば、山嵐とのあいだに違和感を感じることがあつたとしても不思議はない。山嵐は、正義感が強く、義侠心にも富んだ武士であるが、坊っちゃんにない慎重さと深謀遠慮を備えている。「今夜の送別会に大に飲んだあと、赤シヤツと野たを撲つてやらないか」(九)と持ちかける坊っちゃんの言葉に、「どうせ撲る位なら、あいつらの悪い所を見届て現場で撲らなくつちや、こつちの落度になるから」(同)と、「分別のありさうな」態度を示した。山嵐は組織のなかでどのように振る舞うべきかを心得、その資質にも富んだ人物で、江戸期武士の精神を受け継ぐ存在である。

赤シヤツに「天誅」(十一)を加えるに当たつて、坊っちゃんは、「おれは策略は下手なんだから、万事宜しく頼む」(十二)と依頼し、山嵐を参謀役と見立てて、その指示に従う形で、「赤シヤツ退治」(十)に加担した。しかし、山嵐の計画に従つて、枡屋の二階で張り込みを続けるうちに、「今夜来なければ僕はもう厭だぜ」(同)と弱音を吐き、脱落の意思を漏らすに至っている。八日間にもわたつて旅館の一室に閉じこもり、機会を窺うような執念深さは、「竹を割つた様な気性」(七)の坊っちゃんに似つかわしいものではない。まるで探偵のように、隠れて敵の動静をさぐるという遣り口も同様である。相原和邦や小森陽一は、「赤シヤツ退治」のこのような流儀を目して、坊っちゃんの「汚れ」^③や「変質」^④を指摘しているが、「僕はもう厭だぜ」の台詞に、山嵐流の「計略」^⑤(十)に対する違和感が表明されていると考えるべきだろう。坊っちゃんとしては、当初主張していたように、赤シヤツの陰謀にあつて左遷の憂き目をみたうらなり君の送別会の日、彼の怨念を慰める意味をこめて、「撲つてや」る方が好ましかつたに違いない。坊っちゃんと山嵐の距離は、俠客型の武士と江戸期の秩序内的なタイプの武士の相違を反映するものであろう。

以上、長い迂路をたどつたが、坊っちゃんが俠客であると同時に武士でもあることを示した。忘れてならないのは、坊っちゃんが弁慶や公平の系譜に連なる存在であつたとしても、彼らのように、敵を圧倒する猛者ぶりを発揮して、武功をたてたわけではないことである。それどころか、中学生にさえ不覚をとるような非力な侍でしかなかつた。このラスト・サムライの非力こそが、日露戦争の勝利を武士道に帰そうとする言説の虚構性を暴く武器なのである。

四

四国における物語の末段で、坊っちゃんと山嵐は、臥薪嘗胆の辛苦の末に、彼らが「天誅」と呼ぶ復讐の企てを成就した。秋山公男は、赤シヤ

ツ一党に懲罰を下す一連の筋立てが、赤穂浪士が主君の仇吉良上野介を討ち果たす赤穂事件と忠臣蔵の劇と類似していると指摘し、『坊っちゃん』執筆時の潜在意識下に「忠臣蔵」のイメージが伏在し、それが意識するとしないとに拘わらず、影を落とした」のではないかと推測している。²⁵

示唆に富む見解だが、二つの点で異議がある。一つは、武士のアレゴリーとして造形された坊っちゃん・山嵐の復讐が仇討譚のパターンを踏襲していることは確かだが、「忠臣蔵」に限定して考えるべきかどうかという点である。「坊っちゃん」に「伊賀越仇討」の河合又五郎の名が引き合いに与えられていたように、むしろ長い労苦の末に仇を討ち果たすという仇討物一般との対応を見るにとどめるべきではないか。「忠臣蔵」の最大の特徴は、仇討ちの成就が主君に対する忠節を証することを意味している点にある。坊っちゃん・山嵐の復讐は、赤シャツにマドンナを寝取られた上に、僻遠の地に追いやられたうらなり君と、赤シャツの奸策にあつて辞職に追い込まれた山嵐自身の怨みを晴らすことを動機としている。復讐の成功がだれかに対する忠誠心の証明を意味してはいたわけではない。前の節で述べたように、坊っちゃんは固定的な君臣関係の枠に納まらない闘う武士の系譜に属する存在である。不羈奔放な坊っちゃんタイプの武士が「忠臣蔵」の主人公というのはいかにも不自然である。

異議の二点目は、「潜在意識下」に「伏在」していた仇討譚のイメージが投影された点としてある。坊っちゃん・山嵐が日露戦争の勝利を武士道に帰する言説を異化するために非力な侍として意図的に造形されていたように、筋立てが武士の仇討譚のパターンをなぞっているのも意識してのことである。この点については、以下の説明からおのずと納得していただけるものと思う。

ところで、留意しなければならないのは、「坊っちゃん」には、もう一つの復讐劇が書き込まれていることである。日露戦争の祝勝会の日、坊っちゃんと山嵐は、中学校と師範学校生徒の喧嘩に巻き込まれ、手ひどい傷を負ったばかりでなく、翌日の新聞に、二人が生徒を使喚して騒動を起こしたかのように書き立てられた。それが原因で山嵐は辞職を勧告されるに至った。このすべてが赤シャツの仕組んだ陰謀とされている。

この事件も復讐だったと考えられる。復讐を遂行したのは、野だの一部の中学生である。野だは、これ以前、うらなり君の送別会の席で、坊っちゃんと山嵐から「打擲」を受けていた。酔つて、「日清談判破裂して」(九)としきりに唄いながら絡んでくる野だを、坊っちゃんが「ばかりと喰は」(同)すということがあった。打たれた野だは、「おやそはひどい。御撲になつたのは情ない。この吉川を御打擲とは恐れ入つた。愈以て日清談判だ」などとくたを巻いていたが、様子を見に来た山嵐に頸筋をうんとつかまれ、あばれるところを畳の上に投げ出されたのだつた。祝勝会の一件は、このときの遺恨をはらそうとして、野だが深く関与する形で仕組まれた陰謀だつたに違いない。

また、生徒の一部は、寄宿舎の騒動のために、「一週間の禁足」という処分を受けていたから、喧嘩の混乱に乗じて、職員会議で厳格な処分を主張した坊っちゃんと山嵐に復讐する者がいたとしても不思議ではない。坊っちゃん自身もそれに気づいている節がある。生徒が会議での決定に従つて「謝罪」したことに触れて、「謝罪をしなければ其時辞職して帰る所だつたが、なまじい、おれの云ふ通になつたのでとうく大變な事に

なつて仕舞つた」(六)と語っている。「大変な事」とは、内田道雄の指摘するように、「祝勝会当日の事件をさす」と考えられる。

このように、祝勝会の日の騒動も、野だや中学生にとっては復讐であり、彼らなりの仇討ちだったのである。注目したいのは、この騒動が他ならぬ日露戦争の祝勝会の日を持ち上がっていることである。野だにとっては、「日清談判破裂して」云々と唄っている最中に受けた暴力に対する意趣返しだったことにも注意しなければならない。この「日清談判」は、内田によれば、「明治二七、八年の日清戦争当時のことではなくて、日清戦後の台湾戦争の際のことである」とのことだが、日露戦争当でない戦後間もない時期の人々には、三国干渉の圧力でいったんまとまっていた講和条約に変更が加えられたという屈辱的な事実を想起させる歌詞だったことは間違いない。三国干渉の屈辱を「臥薪嘗胆」の思いで耐え忍び、国力を充実させた上で、干渉を主導したロシアに仇を返そうというのが日清戦争後の世論であり、日露戦争はその延長上に行われた戦争だったからである。大塚保治は、「国民的精神の一頓挫」(太陽 明38・12)で、三国干渉から日露戦争に至るまでの国民精神の動向について、次のように述べている。

そこで国民の不平といふものは直に外にそれて三国干渉の方に向き直つて了つて其圧迫を加へた三国に対する敵愾心となり。それから挙国一致臥薪嘗胆といふやうな心持になつて国民的精神がそこに一ト先緊縮し集中して暫く時機を待つて復讐してやらうといふことになつた、其結果として実は今回のやうな大勝利が得られた訳であります、

つまり、日露戦争自体が三国干渉以来の積怨を晴らす復讐劇だったのである。宴席で坊っちゃん・山嵐から手荒く扱われたとき、野だは四度にわたつて「日清談判」を繰り返しており、その「日清談判」の怨みが、他ならぬ日露戦争の祝勝会の日に晴らされたわけであるから、「坊っちゃん」の作者が日露戦争を復讐の成就と見る認識を抱いていることは明らかである。

柴田勝二は、赤シャツを「西洋列強の暗喩」と見立てて、「終盤の坊っちゃんの行動は、当然〈西洋列強〉へのルサンチマンに対するカタルシスとしての意味をもつ。すなわちうらなりからマドンナを奪い取る赤シャツの行動は明らかに日清戦争後の三国干渉を写し取つたものであり、最後の赤シャツの〈成敗〉は、前年に終結した日露戦争を寓意化していることと見ることが出来るからだ」と述べている。『坊っちゃん』の後半の展開は、この三国干渉から日露戦争への歩みを暗喩するものとして受け取れる」とも付け加えている。だが、「日清談判破裂して」と唄っている最中に受けた仇が日露戦争の祝勝会における騒動で晴らされているのだから、「三国干渉から日露戦争への歩み」が「暗喩」されているのが、野だたちが坊っちゃん・山嵐に対して遂行した方の復讐であることは明らかである。「坊っちゃん」には二つの復讐劇が書き込まれているのだが、驚くべきことに、日本国民が「臥薪嘗胆」の末に成し遂げた仇討ちともいうべき日露戦争は、坊っちゃん・山嵐の「赤シャツ退治」ではなく、卑劣な陰謀と評するしかない赤シャツ一党の復讐に重ね合わされているのである。

佐伯順子は、祝勝会の日、坊っちゃんや山嵐が数十人の男が刀を手にして勇壮に踊る余興に見入っていたくだりに触れて、「高知踊りが『坊っちゃん』のなかで、ことさらに詳細に描写されているのは、この刀踊が、主人公の抱く武士的な『男らしさ』の理念を体現するものであるからに他ならない」と述べている。二人が「感心のあまり此躑を余念なく見物して居る」(十) 最中に、「鬨の声」が起り、「赤シャツの弟が、先生又喧嘩です」云々と注進にやって来て、赤シャツの陰謀に陥れられるという展開になる。「鬨の声」は、復讐劇の幕開けを告げる合図であるかのようにだが、その陰険・卑劣な復讐と、武士のアイデンティティを確認するかのような坊っちゃん・山嵐の踊り見物とが近接して布置されていることに注意すべきである。坊っちゃん・山嵐と赤シャツ一党の対照性を際立たせ、復讐劇の非・武士性ともいべき性格を強調しようとする技法である。策略・奇計の類を恣に駆使する赤シャツ一味の復讐と日露戦争を重ね合わせることで、日露戦争が武士の仇討ちに比肩できるような快挙でも美談でもないことを暴露しようとしているのである。

では、坊っちゃん・山嵐の仇討ちと野だらのそれとのあいだにどのような相違があるのだろうか。一つには、仇討ちの仕方に相違がある。前者のそれが、武士が互いに名乗りを挙げて果たし合いをしたように、敵を正面から見据えた上でみずからの腕力を揮っての復讐であるのに対して、後者は当事者が陰に隠れて糸を引く形、あるいは多数に紛れて混乱に乗じる形で遂行されたという相違である。武士時代の仇討ちと近代戦での復讐の相違に対応すると考えてよいだろう。もう一つ、より重要なのは、坊っちゃんたちが復讐それ自体を目的としていたのに対して、野だたちはそうでなかった点である。坊っちゃんや山嵐は、うらなり君と山嵐自身の無念の思いを晴らす以上のことを求めている。一方、野だと赤シャツは、意趣返しをした上に、敵の難儀に乗じて、山嵐を排斥し、学校運営上の障害を除こうと画策した。念晴らしは付けたりにすぎず、真の目的は学校運営の支配権を確立することにあつたと言つてもよいだろう。

おそらく漱石が日露戦争を武士の仇討ちに似て非なるものと位置づけたのは、この復讐劇に、野だたちのそれと同質のものを嗅ぎつけたからであろう。三国干渉の屈辱を晴らすというのは、国民の支持を取り付け、敵愾心を煽るための口実にすぎず、復讐の美名の陰に、満韓地方の權益に対する帝国主義的な野心が潜んでいると認識したのであろう。日露戦争の勝利を武士道に関連づける言説のなかに国民を欺罔する奇計を読みとつたように、武士の仇討ちさながらに、「臥薪嘗胆」の労苦の末に復讐を果たそうという三国干渉以来の掛け声のなかにも、義拳を装うことで、国民の盲目的な協力と献身を引き出そうとする奸策を見てとつたのだと思われる。

宮澤誠一は、『近代日本と「忠臣蔵」幻想』(平13・11、青木書店)で、明治以降「忠臣蔵」が、「欧米列強の外圧という国家的危機を克服するため」に、忠義の対象を藩主から天皇・国家へ転位させ近代ナショナリズムの一環を担うものに再構築され、国民のアイデンティティを形成する重要な役割を負わされたと指摘している。「忠臣蔵」の物語は、敵対する外国への敵愾心を忠義の名のもとに煽り立て、困苦に耐え忍んで国家目標に

挺身することを促す装置として、国家主義の具に供されてきたのだった。管見に入った範囲でも、三国干渉の直後、福沢諭吉が「忠臣蔵」を引合いに出して、義士に倣うように国民に呼びかけている。城明け渡しのおくだりに、大星由良之助が、明け渡しを拒み、上使を相手に城を枕として討ち死にしようとはやり立つ若侍どもを、命を張ってとり鎮めるという一幕がある。三国干渉に対する国民の不満が爆発寸前の状態にあるのを危惧した福沢は、「之を今日の外交政略に照し見るときは芝居とは思はれず、天下無数の人民は今の外交の忠臣蔵に於て由良之助の心を心として沈着するか、或は諸士の血気に倣ふて向ふ所の目的を誤り、上使などを憎しとして軽率暴動、益もなきことに騒立て、世界中に侮を招かんとするか、其国のために利害如何は誠に明白なる可し」と述べている。福沢の文章は、自重せよと戒めることに力点が置かれているが、隠忍して富国強兵の実を挙げることに貢献せよ、しかる後に機を見て復讐の美挙を行え、それが天皇と国家に忠義を尽くすゆえんだ云々のメッセージも含んでいることは明らかである。そうでなければ、「忠臣蔵」の芝居を引き合いに出す必要がないからである。

宮澤によれば、日露戦後の四十年代、「講和条約に対する不満もあって、武士道を鼓舞し、『忠君愛国』を唱える国家主義の思潮が高揚」するなか、「近代日本において最初の熱狂的な忠臣蔵ブームが起こった」という。先に述べたように、「坊っちゃん」は、残念ながら、忠臣蔵のドラマを念頭におき、これを異化した作品ではなかった。もしそうであれば、忠臣蔵ブームを先取りし、ブームの根底にある国家主義的な動向を痛烈に諷刺する作品になりえたであろう。しかし、武士道をもてはやす言説や、日露戦争を三国干渉以来の宿怨を晴らす復讐戦と捉える世論が、忠臣蔵ブームを用意した前駆的な現象であったことは確かであろう。とすれば、その種の言説を鋭く批判した「坊っちゃん」は、時代の趨勢を敏感に察知して、忠臣蔵ブームに顕在化するナショナリズムの欺瞞と反動性をあらかじめ告発した作品と評価できるだろう。

ところで、周知のように内村鑑三と幸徳秋水は、日露戦争時、ともに公然と非戦論を唱えたが、戦時下のジャーナリズムの姿勢を厳しく批判した点でも共通する。内村は、戦時下での新聞報道の「不真面目」さについて、「一ツとして真実を伝ふる者なく、味方の非事と云へば悉く之を蔽ひ、敵国の非事と云へば針小を棒大にしても語るを欲び、真実其物を貴ぶの念は全く失せて、虚を以てするも実を以てするも、たゞ単へに同胞の敵愾心を盛にして戦場に於て敵に勝たしめんとのみ努めました」と述べている。幸徳も、「今の各新聞紙を見よ、彼等果して所謂『社会の木鐸』たり、所謂『公益の爲め』にするの言説ある乎、戦争開始以来、彼等は単に戦争を謳歌し、露国を嘲罵し、軍人に阿諛し、献金を煽動するの外、何事を為せりや」と非難している。幸徳は、新聞各紙が、国民の多数が戦争のしわ寄せを受けて塗炭の苦しみなめつつある事実を「隠蔽し抹殺するに汲々」たるありさまであったと指摘して、「彼等各新聞紙は、実に社会人類の蠹賊に非ずや」と辛辣に批判した。

戦争を美化し、国民を煽動したのは、新聞記者だけではなかった。日露戦争を「正義人道」のための戦争と誇称し、「武士道」の精神で戦われ

たと詐称した、井上哲次郎をはじめとする「識者」と呼ばれる人々も含まれていた。学問的権威を後盾にした彼らの発言は、新聞記事以上の重みをもつて受け止められ、国民を煽動する上でより大きな力を発揮したかもしれない。「坊っちゃん」の批判は主として彼ら学問人の言説を射程におさめるものだったと考えられる。磅礴たるナシヨナリズムのうねりに抗して放たれたその批判は、見てきたように、かなり峻烈なものを含んでいた。しかし、漱石は、内村や幸徳のように、一次的メッセージの形で公然と攻撃したのではなかった。他者の発言と突き合わせてはじめて顕在化する二次的メッセージでの批判であった。いわばあぶり出し文字を使ったような批判の仕方である。

「坊っちゃん」に、山嵐が赤シャツの口口について、「あいつは大人しい顔をして、悪事を働いて、人が何か云ふと、ちゃんと逃道を拵らへて待つてるんだから、余っ程奸物だ」(九)と非難するくだりがある。この赤シャツ批判は、そのまま「坊っちゃん」の作者に差し向けることも可能である。漱石は、同じ大学の教授連の発言などを嘲弄するようなメッセージを発しながら、表立った形で書き付けていないために、当局から抗議を受けたとしても、容易にはぐらかすことができるように配慮している。大学の機構に身を置く漱石には、内村や幸徳のように、戦争に沸き立つ世論を向こうに廻して、堂々と論難する勇氣に欠けるところがあったのだろう。内村や幸徳が学校内権力に公然と反旗を翻した坊っちゃん・山嵐であったとすれば、漱石は残念ながら、赤シャツたるに甘んじざるをえなかった。そのことに伴う疚しさと口惜しさが、主人公を痛快この上ないヒーローとして造形することにつながったのであろう。坊っちゃんは、やはり作者の夢が託された人物であった。

注

- (1) 「坊っちゃん」試論 —— 小日向の養源寺」(『漱石序説』昭51・10、塙書房)。以下、平岡への言及は同じ。
- (2) 「坊っちゃん」の山の手」(『反転する漱石』平9・11、青土社)。
- (3) 「坊っちゃん」解析」(『解釈』昭47・10)。ただし、引用は、漱石作品論集成・第二巻『坊っちゃん・草枕』(平2・12、桜楓社)に拠った。
- (4) 「坊っちゃん」論」(『作品論夏目漱石』昭51・9、双文社出版)。
- (5) 「坊っちゃん」の世界 —— 「譚」の内実」(『夏目漱石の小説と俳句』平8・4、翰林書房)。
- (6) 「坊っちゃん」の系譜学 —— 江戸っ子・公平・維新」(『夏目漱石を江戸から読む 新しい女と古い男』平7・3、中央公論社)。以下、小谷野敦への言及は同じ。

(7) 「聖母を囲む男性同盟 『坊っちゃん』における男色的要素」(『漱石研究』第12号、平11・10)。以下、佐伯への言及は同じ。

- (8) 『坊っちゃん』雑談」(『夏目漱石必携』Ⅱ、昭57・5、學燈社)。
- (9) 『坊っちゃん』の受難」(『漱石 文学の端緒』平3・6、筑摩書房)。
- (10) 明治三十七年十月・渡邊国武「武士道に就いて」、十一月・根本道明「武士道の懐古」、十二月・本多庸一「武士道は基督教に酷似す」、三十八年一月・綱島梁川「武士道と人格の観念」、二月・社説「東西の武士道及び婦道」、坂正臣「武士道と歌」、三月・島地黙雷「武士道の将来」、南條文雄「武士道と仏教との関係につきて」、四月・山川健次郎「武士道とゼントルマン」、五月・大隈重信「武士道論」、六月・箕作元八「西洋の武士道」、八月・藤井健治郎「西洋のストア主義と日本の武士道」。なお、明治期の雑誌からの引用文は、傍点・圏点の類をすべて省略している。
- (11) 明治三十七年九月十三日「官報」。ただし、『明治ニュース事典』Ⅶ(昭61・1、毎日コミュニケーションズ)を参照した。
- (12) 「言文不一致」(『時事新報』明28・5・4)。ただし、引用は、『福沢諭吉全集』第十五卷(昭36・4、岩波書店)に拠った。
- (13) 「列国紛争の真相」(『平民新聞』明37・4・3)。ただし、引用は、『幸徳秋水全集』第五卷(昭43・9、明治文献)に拠った。
- (14) 「文章の力」——夏目漱石「坊っちゃん」(『文芸』昭54・5)。
- (15) 田原嗣郎訳(日本の名著12『山鹿素行』昭46・9、中央公論社)。
- (16) 田原嗣郎「山鹿素行と武士道 赤穂事件に関する論評をめぐって」(日本の名著12『山鹿素行』)。以下、田原への言及は同じ。
- (17) 『漱石文学のユーモア』(平7・1、めぐるくまーる)。
- (18) 「漱石と『坊っちゃん』」——その心理学的一考察」(『国語国文学』第12号、昭41・3)。
- (19) 『坊っちゃん』——面白さの構図」(『漱石文学考説』——初期作品の豊饒性』平6・5、おうふう)。以下、秋山への言及は同じ。
- (20) 『本邦俠客の研究』(昭56・2、西田書店)。初刊は、昭和八年。以下、尾形への言及は同じ。
- (21) 津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』——武士文学の時代」(『津田左右吉全集』別巻第三、昭41・4、岩波書店)。以下、津田への言及は同じ。
- (22) 『江戸ッ子』(昭55・8、吉川弘文館)。以下、西山への言及は同じ。
- (23) 「『坊っちゃん』と漱石」(『漱石文学の研究』——表現を軸として』昭63・2、明治書院)。
- (24) 『坊っちゃん』の(語り)の構造——裏表ある言葉」(『構造としての語り』昭63・4、新曜社)。
- (25) 水川隆夫『漱石と落語 江戸庶民芸能の影響』(昭61・5、彩流社)も、「坊っちゃん」のプロットが、「講談の仇討物、特に「義士伝」

のパロディとなっている」と指摘している。

- (26) 日本近代文学大系25『夏目漱石』Ⅱ(昭44・10、角川書店)。以下、内田への言及は同じ。
- (27) 「戦う者」の系譜——『坊っちゃん』における〈戦争〉(「敍説」2・第8号、平16・8)。
- (28) 「唯堪忍す可し」(「時事新報」明28・6・1)。ただし、引用は、『福沢諭吉全集』第十五卷(前掲)に拠った。
- (29) 「日露戦争より余が受けし利益」(「新希望」明38・11)。ただし、引用は、明治文学全集39『内村鑑三集』(昭42・12、筑摩書房)に拠った。
- (30) 「戦争と新聞紙」(「平民新聞」明37・3・6)。ただし、引用は、『幸徳秋水全集』第五卷(前掲)に拠った。